ドイツ・ハンブルクにおける文化的多様性に関連した音楽教育

伊　藤　　真
（本学大学院教育学研究科）

Music Education and Cultural Diversity in Hamburg, Germany

Shin ITO

Abstract
In education for children from diverse cultural and linguistic backgrounds, including immigrants and refugees, linguistic education is a top-priority issue to improve their academic abilities. However, the variety of cultural education available is of the same importance as linguistic education because of its crucial role in building children's identity and enhancing their adaptability to school culture. Linguistic and cultural education should be two of the most important aspects; therefore, multidimensional educational efforts are essential in society and schools. This paper shows the characteristics of music activities/learning related to cultural diversity in Hamburg, Germany in some cases. The extracted cases were categorized into three types: (a) school-based music-learning projects that the state government (the departments of School and Vocational Education, and of Culture and Media) plays a formal role in; (b) school concerts and music festivals organized by associations for music education; and (c) music activities/projects led by private corporations or foundations. These different types of music activities and projects that mostly targeted children from diverse cultural/linguistic backgrounds were implemented in parallel and with continuity. Not only the state government, but also private corporations and foundations emphasized the public interest and supported children's musical experience by providing generous grants. These efforts contribute strongly to the sustainability of music education respecting cultural diversity in building a comprehensive music-learning network in Hamburg.

１　背景と目的

昨今の移民・難民問題などを背景とするグローバル化の進展によって，社会一般における職業生活のみならず学校や教育の文脈においても文化的多様性はキーワードとなっている。特に，子どもの背景にかかわらず，すべての子どもの学びを保障することが求められている。外国につながる子ども [1] に対しては，多くの場合，学習環境で用いられる言語の教育を重点化したり母語保障に対して配慮をしたりするなどをとおして，教科学習の成果を上げ，学力を向上させる取り組みがなされる。一方で，それと並行しながら，あるいはそれの実現性を高めるために，多様な文化教育をとおして子どものアイデンティティ形成や学校・教育文化への適応がめざされる。このように，教科学習を進めるために必須となる言語教育とそれらを支える文化教育は両輪でなければならず，子どもの望ましい社会参加を促進するためには多面的な取り組みが必要である。

本稿では，ドイツにおける文化的多様性に関連した音楽教育の状況を捉え，内なるグローバル化が進展する我が国への示唆を得ることを目的とする。ドイツは，他のヨーロッパ諸国と同様に，多種多様な文化的背景をもった人が多く居住している国である。その多くは外国人労働者であったが，近年の難民の受入れによって，さらに外国人とその子どもの割合は増加している [2]。本稿では，ドイツのなかでも筆者が継

続的に調査・研究を行ってきたハンブルクを事例としてとり上げる。北ドイツの都市州ハンブルクは，首都ベルリンに次ぐ大都市であり，外国人居住者の割合が高い[3)]。ハンブルクには，学校，文化施設，その他の文化創造者が共同で行うプログラムやプロジェクトが多数あり，それらはハンブルクの文化教育（Kulturelle Bildung）の重要な構成要素となっている。州のウェブサイトには，これらの事業として 14 種が掲載されている[4)]。筆者はこれまでに，そのなかのひとつである小学校を対象とした器楽教育プロジェクト（JeKi）の形態や内容，教育的意義について調査・報告を行ってきた。プロジェクト参加校のすべての子どもがその社会階層や家庭環境に関わらず楽器を貸与され，音楽の授業内で楽器のレッスンや演奏会出演の機会が得られる点や，そこでの学びがプログラム修了後の音楽生活に大きな影響を与える点において，教育的価値が高い。このプロジェクトを含めて，ハンブルクにおける文化教育に関わるプログラムやプロジェクトを抽出し，目的，内容，形態を整理する。対象を，①州が関与するもの，②音楽教育団体が主導するもの，③民間企業・財団が主導するものに分類する。これらの内容を精査したうえで，とりわけ外国につながる子どものための音楽教育や音楽的なアプローチによる文化教育などの音楽学習の機会がどのように存在しているのか，またそれらがどのように相互に関連し，ハンブルク社会に位置づいているのかを考察する。

２　州が関与する音楽学習の機会

（１）器楽学習プロジェクト「すべての子どもに楽器を」（JeKi）

「すべての子どもに楽器を」（Jedem Kind ein Instrument）と名の付いた音楽学習は，ドイツ全国で展開される，小学校段階の子どもを対象とした器楽学習のシステムである。一般に JeKi（イェーキ）と短縮形で呼ばれる。小学校の音楽のカリキュラムのなかに，オーケストラを中心とした楽器のグループレッスンを併置し，第 2 学年から最終学年の第 4 学年にかけて選択した楽器の学習を行う。2007 年にノルトライン・ヴェストファーレン州で始まり，ハンブルクでは 2009 年から学校・職業教育省によって開始された。州内に 200 余ある小学校のうち，プロジェクト参加を希望した学校のなかから家庭や地域の経済状況に応じて 62 校が選ばれ，現在までに 3 万人の子どもが学んだ。州内のすべての小学校で実施されないのは，富裕層の家庭が集まる地域ではそもそも家庭にプライベートな音楽教育を受けさせる経済能力と教育への関心があり，学校で特別にプロジェクトを展開する必要がないからである。つまり，ドイツの経済格差にもとづく教育格差を是正するべく, 何もしなければ音楽教育に接近することがない家庭の子どもに手を差し伸べ, 無償で音楽教育の機会を与えるシステムといえる。その恩恵にあずかるのは，多様な社会階層の子どもが混じるヘテロな集団の学校や, 移民･難民の背景をもった経済的に困難を抱える家庭が集まる地域の学校, もしくは障害のある子どもが通う特別支援学校などが中心である。

このプロジェクトについてはこれまでに筆者が現地調査と文献調査をとおして，レッスンの特徴と教育的意義（伊藤 2017a），レッスンと通常の音楽の授業の関わり（伊藤 2017b），プロジェクトに関与する音楽教師と楽器講師への研修（伊藤 2016），プロジェクトの組織と運営（伊藤 2018）について報告を行ってきたので，詳細はそれらにゆずり，ここでは本稿の目的に即して要点を述べる。

通常の音楽の授業と並行して，州の教育プランに則った音楽科教育の枠組みのなかで実施されるこのプロジェクトは，第 2 学年でオーケストラを中心としたほぼすべての楽器群の学習を行い，第 3 学年と第 4 学年の 2 年間をかけて選択した楽器をグループレッスンをとおして学ぶものである。そこで指導するのは学校の音楽教師に加えて，学校・職業教育省と一般職員契約を結んだフリーランスの演奏家や，学校と協力契約を結んだ音楽学校や音楽院の楽器講師（約 400 名が登録）である。音楽学校や音楽院での個人レッスンとは異なり，あくまでも学校教育のなかで行われる音楽学習であるため，その進度は極めてゆるやかであり，小学校を卒業するまでに何かができるようになるレベルをめざすにとどまる。とはいえ，プロジェクトの成果は大きく，グループでの学習をとおして音楽的な成功体験を積み重ね，楽器ごとの発表会や学校演奏会, 州の合同演奏会などの多くの発表の場をとおして達成感を味わい, 自己肯定感を高めるなど, 学習効果は高い。2009 年から始まったこのプロジェクトは 2019 年で 10 周年を迎えた。プロジェクトの指導者に定期的に送付されるニュースレターの 2019 年第 3 号では，この 10 年の成果として，ハンブルクの学校で最も大きな文化プログラムとなったこと，多くの各種演奏会やプロの演奏家による専門教育を行っ

てきたこと，家庭の背景に関わらずひとつの楽器を無償で学習する平等な教育機会を提供していること，ひとつのことをやりとおす力を高めるとともに集中力を改善してきたこと，ストレス克服のためのポジティブなストラテジーを構築していること，ADHD の子どもや読み書きの弱い子どものポジティブな発達を促進すること，よい人間関係能力を伴った音楽の基礎を育成してきたこと，音楽学校や音楽院などとの協働活動によってプロジェクト修了後（小学校卒業後）も楽器演奏を成果豊かに継続していること，などがまとめられている[5]。

このプロジェクトの重要な点は，多様な文化背景をもつ子どもを含む，社会的な課題をもつ子どもに対して，音楽の専門的な技術の習得のみならず，他者との関わり方や音楽に向き合う態度を育成し，音楽をとおした自己と他者の（文化的）理解を促進するなどの社会的コンピテンシーや自己コンピテンシーの獲得をめざし，実際に実現していることである。

図１　JeKi プロジェクトのロゴ
（JeKi ウェブサイトより転載）

（２）プロジェクト基金　文化と学校

2019 年から文化・メディア省と学校・職業教育省は 7 つの財団との共同事業として，学校と芸術家（音楽家を含む）の協働による文化活動に年間で 52 万 5000 ユーロを支援するプロジェクト基金「文化と学校」（Projektfonds Kultur & Schule）を始動した[6]。2019 年 2 月のプレス発表によると，市議会はこの基金に対して州が 42 万 5000 ユーロを，財団が 10 万ユーロを提供するとしている[7]。文化・メディア省大臣のブロスダ氏は，この基金によって子どもたちに芸術的な経験を可能にするのみならず，対話する能力，人格の発展，知識の獲得などを支援することを述べている[8]。

審査[9] によってプロジェクト 1 件につき 1000～1 万 5000 ユーロの交付が決定される（最大 3 年間で 4 万 5000 ユーロ）。2019 年 5 月～12 月に開始されるプロジェクトには全 25 件が採択され，その内訳は 2 年間にわたるものが 3 件，1 万ユーロを超える 1 年間のものが 10 件，1 万ユーロ以下の 1 年間のものが 12 件であった。そのなかで，直接音楽に関わるプロジェクトは 2 件あった。以下に，その概要を述べる。

図２　プロジェクト基金のロゴ
（LAG Kinder- und Jugendkultur ウェブサイトより転載）

①Starke Musikanten（2019 年 8 月 8 日～2021 年 7 月 31 日実施）

ハンブルク音楽院（Hamburger Konservatorium），障害者福祉事業所（BHH Sozialkontor），ヒルテンヴェク特別支援学校（Schule Hirtenweg）の三者が協働で行うプロジェクトで，1 万 6260 ユーロの支援を受けている。「重度の障害のある子どもも合奏や楽器の演奏をしたい！」という思いを基に，特別支援学校において，2 人の音楽療法士が障害のある子どもに対して音楽実践と音楽療法を毎週実施する。目的は，音楽実践と音楽療法の枠組みにおいて，子ども一人ひとりがもつ個別の要求を捉えたうえで，自我の強さと人格を発展させること，自己調整と心身のバランスを強めること，資源を見つけ，新たな能力を試すこと，一緒に演奏する喜びを体験すること，自信をもち，自分で意識して行動すること，接触能力やコミュニケーション能力を拡大すること，言語表現を発展させ，支援することなどである。ヒルテンヴェク特別支援学校では，すでに放課後プログラムとして音楽バンドの活動を行っているが，この新たなプロジェクトは，演奏をとおしたポジティブな経験をさらに豊かに深めるものである。また，このプロジェクトは治療上の要求を備えるものではなく，子どもに新たな環境で自分を試す機会を与え，かれらの潜在能力をさらに伸ばすものである。

②Reflektorklassen（2019 年 6 月 20 日～2020 年 6 月 19 日実施）

プロの室内オーケストラ団体であるアンサンブル・リフレクトーア（ensemble reflektor）とヴェッデル学校（Schule auf der Veddel）が協働で実施するプロジェクトで，1 万 5000 ユーロの支援を受けている。アン

サンブル・リフレクトーアは2016年秋から音楽教育部門（MUVE: Musikvermittlungszweig）を立ち上げ，テーマに基づいた教育的なアプローチによる演奏会やワークショップなどを展開している[10)]。ヴェッデル学校は，両親の年収等に基づいて子どもの社会的・文化的状況を説明するKESS指数が6段階のうち最も低い学校に位置づけられ，就学前クラスから第 10 学年までを統合している（第 1〜4 学年は小学校［Grundschule］，第5〜10学年は中学校［Stadtteilschule］）。すべてのクラスで多様な特別なニーズのある子どもも共に学ぶ重点校となっており，移民・難民の背景のある子どものために，トルコ語とアラビア語の母語教育も行っている。これら室内オーケストラ団体と学校が長期のパートナーシップを結ぶことによって，子どもと音楽家の個人的な関係を越えて学校における文化の重要性を強化し，社会的に積極的に参加する演奏家のタイプを構築する。このプロジェクトの対象は第5・6学年であり，全クラスに演奏家2名が介入し，子どもと相互に協力関係をもつ。演奏家は教師とともに年6回の授業をつくる。演奏会のリハーサルの見学やオーケストラのワークショップなどの協働体験は，子どもの創造的な潜在能力を活性化し，社会的・文化的コンピテンシーを強化することにつながる。

学校のウェブサイト[11)]には，2020年2月5日に行われたプロジェクトの様子が次のように報告されている。

> オーケストラが私たちの文化クラス（Kulturklassen）を次の音楽教育プロジェクトに招待してくれました。5年生はHalle 424で行われたオーケストラのリハーサルに立ち会い，オーケストラ作品を2曲聴き，グループに分かれてさまざまなプロジェクト（パントマイム，響きの体験，楽器の学習，空き缶で楽器作りなど）を演奏家と一緒に行いました。子どもたちはみんな，興味をもって活動を楽しみ，創造的なアイディアをふくらませました。

この学校の小学校段階では前述した州の器楽教育プロジェクトJeKiに参加しており，この取組みによって，子どもたちは中学校段階でも継続的にオーケストラとの関わりをもつことができる。パートナーを結んでいるアンサンブル・リフレクトーアが提供する教育プログラムは，パッケージ化された定型のものや特定の作曲家に焦点を当てたものではなく，その都度の演奏会プログラムを基に作られることで定評がある。子どもたちがこれまでに経験したオーケストラ活動をさらに強化する取り組みとして興味深い。

３　音楽教育団体が主導する音楽学習の機会

ドイツ音楽科授業連盟（BMU: Bundesverband Musikunterricht）は，ドイツのすべての学校における音楽教育や音楽生活，音楽活動を支援し，また音楽教師の専門性開発を支援することを目的とした団体であり，音楽教師，教員養成課程の大学教員，将来教職に就く者によって構成される。研修や教育研究大会，教育的なコンクール，州と共同での催しなどを開催している。

ハンブルク支部では，学校・職業教育省の協力のもとで2年に1度，ハンブルク学校音楽祭（Hamburger Schulen musizieren）を開催している。すべての学校種・学年の4000名以上の子どもが参加し，各学校の演奏会（Schulkonzert），合同演奏会（Begegnungskonzert）など50以上の演奏会が行われる。これら一連の演奏会に出演した団体から1団体がドイツ全国演奏会（Bundesbegegnung Schulen musizieren）にハンブルク代表として派遣される。この音楽祭は，多くの音楽教師と協力のもと，学校音楽教育の多様性を拓き，子どもたちに大きく開かれた耳をもたせることをめざしている[12)]。

2019年2月10日には，NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団（旧北ドイツ放送交響楽団）の本拠地で2017年に新たにオープンしたエルプフィルハーモニー（Elbphilharmonie）の小ホールで合同演奏会（Schulen musizieren – Die Begegnung）が開催された。28校がビデオ審査に応募し，小学校・中等学校・特別支援学校から5つのアンサンブル（合唱・ビッグバンド・バンド・ラップ・オーケストラ）が出演した。クライマックスは 170 名の全参加者による最終演目で，アルゼンチン出身で NDR ビッグバンドの打楽器奏者Marcio Doktorが指揮をした。

このような他者と関わる演奏の機会は，障害のある子ども，移民の背景のある子ども，社会的に排除される周辺集団の子どもの統合を支援するものとして位置づけられている[13)]。

図３　ハンブルク学校音楽祭
プログラム表紙

図４　エルプフィルハーモニーとの
共同による合同演奏会
プログラム表紙

４　民間企業・財団が主導する音楽学習の機会

（１）The Young ClassX

The Young ClassX は 2008 年から始まった包括的な音楽教育プロジェクトで，ドイツ大手の通信販売企業グループ Otto Group とアンサンブル団体 Salut Salon が主導している。協力パートナーには，文化・メディア省，学校・職業教育省，教師教育・学校開発研究所[14]，ハンブルク州立歌劇場，NDR エルプフィルハーモニー管弦楽団，スタインウェイ＆サンズ社，ヤマハ社，その他多くの企業が名前を連ねている。大きく合唱部門，オーケストラ部門，移動音楽学習部門に分かれている。

①合唱部門

合唱部門では，ハンブルクの 7 つの地区に合唱団（Stadtteilchöre）が設立され，学校の枠を越えてさまざまな学校や学年の子どもが参加している。練習の成果を地区演奏会で発表する。この地区合唱団に所属する者が一同に会して全体合唱団（Gesamtchor）が結成される。ハンブルクの歴史あるコンサートホールのひとつであるライスハレにて 1 年に 1 度演奏会が行われる。さらに，40～50 名の選ばれた子どもでプロジェクト合唱団（Projektchöre）が結成され，国際的なプロジェクトなどの特別な枠組みで歌う。これまでに，聖ニコライ児童合唱団と共同で「マタイ受難曲」の少女合唱団を結成したり，若者のためのエストニアのプロジェクト合唱団を結成したりした。ここで歌う子どもは週末練習に参加し，次回の大きな演奏会出演に向けて一緒に練習している。

②オーケストラ部門

オーケストラ部門には，1973 年に創立されたフェリックス・メンデルスゾーン・ユース・オーケストラ（Felix Mendelssohn Jugendorchester）と 2010 年に創立されたジュニア・オーケストラ（Junior Orchestra von The Young ClassX）がある。ユース・オーケストラには 10～27 歳の 100 人以上が所属する。2017 年 1 月には，先述したエルプフィルハーモニーの大ホールで青少年アンサンブルとして最初に演奏した。このオーケストラの団員の多くは青少年音楽コンクール全国大会の入賞者である。2014／2015 年のシーズンのはじめに，ハンブルク交響楽団（Symphoniker Hamburg）とパートナーシップを結んだ。もうひとつのジュニア・オーケストラは，The Young ClassX の楽器奨学生（楽器のレッスンが無償で提供される）とハンブルクの他の音楽学生が共に演奏する団体である。ハンブルク音楽演劇大学教授 Clemens Malich の指導のもと，30

名ほどの若い音楽家が週に 1 度練習をしている。楽器初心者でも演奏可能な独自に編曲したオーケストラ作品などもプログラムにもっている。

③移動音楽学習部門

この移動音楽学習は MusikMobil（ムジークモビール）と呼ばれ，中学校・高校（第 5～13 学年）の生徒をバスに乗せて，演奏会や特別な音楽学習などの機会に連れて行き，クラシック音楽との出会いを無償で提供するものである。NDR エルプフィルハーモニー管弦楽団の演奏会に行ったり，連邦青少年バレエを訪問したり，スタインウェイ＆サンズ社のハンブルク工場を見学したりする。プログラムの提供元は，ハンブルク美術工芸博物館，NDR エルプフィルハーモニー管弦楽団，ハンブルク州立歌劇場，ハンブルク中央図書館，ハンブルク交響楽団などである。

2017～2018 年には 4 回にわたって，ハンブルク交響楽団との共同プロジェクト「国境のない音楽！」（Grenzenlos Musik!）を実施し，難民の家族と難民クラスの子どもにハンブルク交響楽団の演奏会を訪れる機会を提供した [15)]。

The Young ClassX のウェブサイトでは移動音楽学習のプログラムを検索することができる。2019 年 10 月～2020 年 7 月の期間に提供されるプログラムを検索したところ，27 のプログラムがヒットした [16)]。そのなかで，2020 年 1 月 14 日に開催されたハンブルク州立歌劇場管弦楽団の演奏会は KESS 指数が 1 または 2 の学校のみを対象としたものであった。

（２）プロジェクト助成金「アイディアの光る，音楽の文化的多様性」

リズ・モーン文化音楽財団（Litz Mohn Kultur- und Musikstiftung）が行う全国公募型の助成金に，「アイディアの光る，音楽の文化的多様性」（Ideeninitiative, Kulturelle Vielfalt mit Musik）がある。この財団の目的は，芸術と文化を支援することであり，特に音楽の領域で，教育と国際間の協調を支援している。具体的には，オペラ歌手の後進の支援，音楽教育の支援，異なる文化背景の子どもと青少年の相互理解促進などである。

この助成金は，公益性をもつ教育機関，施設，団体，または個人が行う創造的で先進的なプロジェクトに対して，年間総額 10 万ユーロ，1 件最大 7500 ユーロの支援をするものである。対象となるプロジェクトは，難民の子どもの支援と統合をねらっていることが条件で，毎年 20 件程度が助成の対象となっている。2008～2018 年の間に助成を受けたプロジェクトのうち，ハンブルクに関わるものは以下のとおりであった [17)]。

①難民のためのラップ音楽（Rap for Refugees）（2017 年）

このプロジェクトは，グラフィティ，ストリートダンス，ビートボックスのワークショップ（各 2 時間）で構成される。ハンブルクの社会サービス団体 basis & woge をとおして難民の子どもを含む 80 名が参加した。夜には 4 時間の慈善フェスティバルを行い，ワークショップの成果を発表した。

②ハンブルクのラッパー Lasko との学校プロジェクト（Schulisches Projekt mit dem Harburger Rapper Lasko）（2018 年）

ハンブルク・ハーブルク地区にあるレシング中学校（Lessing-Stadtteilschul）が行うプロジェクトで，多様な背景をもつ 11 年生 23 名が参加した。ハンブルク・ハーブルク地区は住民の 44%を移民が占める。移民の背景をもつ子どもの割合が約 70%と高く，2 つの国際準備クラスでは難民の子どもが学習している。参加した生徒は 12 月から 2 月のはじめまで毎週 90 分の音楽の授業と 2 回のプロジェクト・デーにおいてハーブルク出身のラッパーLasko と音楽教師とともに自分のラップ音楽を創作した。作品は成果発表会で発表し，優良作品は青少年センターBlechkiste のスタジオで録音された。このプロジェクトでは，数多くの文化活動を提供している青少年センターでの生徒の音楽活動の活性化を図っている。

③音楽とダンスの交流（ExTra! Exchange Traditions）（2018 年）

州立青少年音楽学校がハンブルク音楽演劇大学の「国際音楽教育」プロジェクトと共同で実施したもので，移民の背景のある／ない音楽学校の生徒と難民の子ども 50～60 名が参加した。このプロジェクトの焦

点は，難民，統合，ドイツと難民の子どもの共生，および共通性の発見と構築というテーマについて具体的に取り組むことにある。参加者はそれぞれの文化を体験し，芸術的手段でそれに取り組む。2019 年 3 月のプロジェクト週間では，毎日さまざまなワークショップが行われ，青少年音楽学校の「文化の音楽フェスタ」において成果発表が行われた。

５　文化的多様性を尊重した音楽学習のあり方

ハンブルクをひとつの事例として，文化的多様性を尊重した音楽学習のあり方を検討したい。これまで見てきたように，ハンブルクにおける音楽学習の機会は小学校段階と中等学校段階をまたぐもの，あるいはつなぐものとして存在し，学校単位で行うものや個人で行うものなどさまざまな形態がある。それらのイニシアチブをとるのは，州（学校・職業教育省や文化・メディア省），音楽教育団体，企業グループ，財団など多様である。州が行う小学校の器楽教育プロジェクトは，子どもが音楽に触れる機会を創出し，その後の継続的な音楽との関わりを強化するものである。つまり，学校での音楽学習は企業グループが主導する音楽活動や音楽学校における専門的な学習へ接続し，成長に伴って音楽学習の継続を実現している。また，学校音楽教育に強く関与する音楽教育団体が，多くの学校の子どもの音楽活動を支援していることは，主体である子どものみならず，学校の音楽教師にとっても音楽の重要性（特に社会的に問題を抱える子どもに対して）を再認識し，文化的多様性を尊重した音楽学習の内容や方法を学ぶことにつながる。さらに，州や財団が文化教育の視点から創造的な音楽学習プロジェクトに対して資金面での支援を行うことによって，学校と芸術団体（音楽家）との協働的活動が加速度的に促進され，子どもを取り巻く社会的な取り組みとしてその位置づけが強化・拡大されている。このようにハンブルクでは，多様なタイプの音楽学習の機会が平行・連続しながら，包括的な音楽学習ネットワークを実現しているといえる。

これらの取り組みはすべての学校種や学年の子どもを対象としながらも，社会的な課題として認識されている「外国につながる子どもに対する教育」としても焦点化されていることが明らかとなった。州が関与するもの，音楽教育団体が主導するもの，企業や財団が主導するもの，そのいずれもが多様な文化的背景の子どもを対象とした（または包摂した）取り組みを含んでいた。つまり，そのような子どもがあるところで限定的に対象化されるのではなく,「いたるところで」学習や活動に参加できる「学習機会の多様性」が極めて重要なのである。さらに，それら多様な学習機会は，社会のなかで持続性をもたなければならない。その点について，本稿で検討した学習機会はいずれも公益に資する原則のもとで展開され，それぞれのプロジェクトの持続性と発展性に貢献している。これらの点は外国につながる子どもに向き合う我々が学ぶべきことであろう。

注

1）本稿では, 移民・難民の背景をもつ子どもや, 親が外国籍である子どもなどの多様なケースを包括して, 受入国とは文化や言語を異にする状況にある子どもを「外国につながる子ども」と呼ぶ。

2）正確には「移民の背景のある居住者」という言葉で定義され，自身または少なくとも両親のどちらかがドイツ国籍をもたずに生まれた者を指す。ドイツ連邦統計局（Statistisches Bundesamt）が公表する国勢調査によれば，2019 年に 18.7%であったのが，2018 年には 25.5%に増加し，ドイツ全体で 4 人に 1 人を占める。

3）2018 年の国勢調査では，移民の背景のある居住者の割合が高い順に，ブレーメン（35.1%），ヘッセン（33.6%），バーデン・ヴュルテンベルク（33.4%），ハンブルク（33.3%）であった。

4）Hamburger Bildungsserver: Künstlerisch-kulturelle Kooperation, Programme und Projekte. [https://bildungsserver.hamburg.de/kueunstlerisch-kulturelle-kooperationen/]（2019.6.17）

5）Jedem Kind ein Instrument – BSB Hamburg (2019) *Das Jubiläumsjahr im Überblick, JeKi Newsletter 03/2019 vom 12.09.2019*, S.1.

6）このプロジェクト基金は LAG Kinder- und Jugendkurtur が主導し，プロジェクト全体の組織と申請手続きを担当し，州をとおして助成金が払われる。支援する 7 つの財団は，Dorit & Alexander Otto Stiftung,

Körber-Stiftung, Alfred Toepfer Stiftung F.V.S., Gabriele Fink Stiftung, Claussen-Simon-Stiftung, Bürger Stiftung Hamburg, Dürr-Stiftung Hamburg である。

7）Behörde für Kultur und Medien: Neue Projektfonds „Kultur & Schule“ fördert kulturelle Bildung an Hamburger Schulen. [https://www.hamburg.de/pressearchiv-fhh/12153492/projektfonds-kultur-undschule/]（2019.6.20）

8）Ebd.

9）審査員は，学校・職業教育省と文化・メディア省の各文化教育担当，支援財団のひとつである Gabriele Fink Stiftung と基金を主導する LAG Kinder- und Jugendkultur の各代表者，およびダイバーシティーの専門家 1 名を加えた，計 5 名からなる。審査基準は以下の 5 点。①文化教育の領域で学校の持続的な発展に刺激を与えるものであること。このプロジェクトは持続性の性質がある。②芸術と文化を具体的に経験・体験することができ，参加者をプロジェクトのなかで活発に共同活動する者として捉えていること。③テーマの質において傑出していること。プロジェクトでは授業や課外授業の提案がコンセプトに関して相互に関連付けられる。④芸術的な質において傑出していること。⑤革新的で専門分野を横断し，学際的な内容であること。
LAG Kinder- und Jugendkultur: Projektfonds, Allgemeines, Jury.
[https://www.kinderundjugendkultur.info/index.php?s=projektfonds_allgemeines_jury]（2019.10.3）

10）ensemble reflector: MUVE. [https://www.ensemble-reflektor.de/musikvermittlung/]（2019.9.30）

11）Schule auf der Veddel: Die 5.Klassen treffen das ensemble reflektor.
[https://schule-auf-der-veddel.hamburg.de/category/allgemein/]（2020.3.1）

12）BMU LV Hamburg: Hamburger Schulen musizieren. [https://hh.bmu-musik.de/projekte/schulen-musizieren.html]（2019.9.30）

13）BMU: Schulen musizieren, Bundesbegegnung “Schulen musizieren” – das BMU-Festival.
[https://www.bmu-musik.de/projekte/schulen-musizieren.html]（2019.10.30）

14）学校・職業教育省の組織であり，大学（修士課程）の教員養成課程を修了した後の第 2 次国家試験までの教育や現職教員のための研修・相談を行う機関。詳細は，伊藤（2019）および伊藤（2020）を参照のこと。

15）Deutsches Musikinformationszentrum: Grenzenlos Musik! [https://integration.miz.org/grenzenlos-musik-k40172]（2020.2.1）

16）The Young ClassX [https://www.theyoungclassx.de/]（2019.10.11）

17）Liz Mohn Kultur- und Musikstiftung [https://kultur-und-musikstiftung.de/]（2019.9.30）2020 年 2 月現在，過去に採択されたプロジェクトの閲覧はできなくなっている。

引用文献

伊藤真（2016）「ドイツ・ハンブルク州の小学校における器楽教育プロジェクトの指導者研修」『日本教科教育学会第 42 回全国大会論文集』pp.168-169，および発表資料（2016.10.23）

伊藤真（2017a）「ドイツの小学校における器楽学習の特徴と意義―ハンブルク州の JeKi プロジェクトの事例から―」『音楽文化教育学研究紀要』XXIX，pp.13-22

伊藤真（2017b）「ドイツの小学校における器楽学習―JeKi プロジェクト導入による音楽科授業の変容―」中国四国教育学会『教育学研究紀要（CD-ROM 版）』第 62 巻，pp.274-279

伊藤真（2018）「ドイツの器楽学習プロジェクト運営におけるニュースレターの役割」『日本音楽教育学会第 49 回岡山大会プログラム』p.139，および発表資料

伊藤真（2019）「ドイツにおける音楽科教師のための継続教育―ハンブルク州教師教育・学校開発研究所の研修を中心に―」中国四国教育学会『教育学研究紀要（CD-ROM 版）』第 64 巻，pp.222-227

伊藤真（2020）「ドイツの音楽科教師の自律性形成プロセス―ハンブルク州における教員養成制度と授業実践の検討をもとに―」『増山賢治先生御退官記念論集』増山賢治先生御退官記念論集編集委員会，pp.70-82